

# 春燈

6 月号

June 2011



主宰の句

安立公彦

春やいま黄の花匂ふ夕ごころ

たそがれの風の氣息や雪柳

大いなる花の虚子忌となりにけり

散らずして錆浮くあはれ白木蓮

地震の地の友如何ばかり春の宵



# 蟬しぐれ子の誕生日なりしかな

『古暦』 昭和二十年

『古暦』 巻頭の句。今日も暑くなるのだろうか、朝から蟬の声が凄まじい。ふと子らのことが頭を過る。いつも米軍が上陸してくるやも知れぬ緊迫したなかにあつて、この句あつげらかんとして明るく、爽やかなところが良い。子への思いは戦後の「雁啼くや」など数々の兄妹吟を生み、晩年の「へひとの子の親のさびしさ鳥雲に」の絶唱へと引継がれ、昇華されていくのである。「蟬しぐれ」は僕の胸の底ひに、いつも在る先生の句である。

植 田 利 一

# 亀鳴くや事と違ひし志

『暦日抄』昭和二十九年

昭和三十八年万太郎先生亡きあと、自らを励ましながら「春燈」をもちたててこられた敦先生。戦後、公私ともに多難な時代を歩んでこられたお気持ち、さりげなくこの句にあらわれている。『古暦』の〈世にも暑にも寡黙をもつて抗しけり〉にも先生の誠実で忍耐強いお人柄がにじみでている。「亀鳴くや」の措辞に、謙虚さと悔恨の思いをこめられ、独特な俳味を感じさせられる。

江 草 礼

# 燈下集



○ 鈴木静恵

蒼茫の武州の空や初ひばり  
嘴太鴉頭上掠めし余寒かな  
妖精の乱舞や風の花こぶし  
春眠の夢奪ひたる地震かな  
再会の涙やうるむ春の月

○ 菊地瑩子

春深しカヴァレリア・ルスチカーナが好き  
やけつばちの句を書き山に笑はれて  
春のいちにち何も無かつたやうに暮れ  
東日本大震災春夕焼け燃ゆ  
浄水器通る五月の水の音

○ 鈴木直充

○ 加藤良子

赤白の梅を描きけり水墨画  
赤鉛筆まあるく削る春の夜  
地の怒り水の怒りや冴返る  
春暁の地震みんなを起こしけり  
大地震や悼みてあまる三月尽

○ 鈴木直充

きぎす啼くみちのくの地震鎮もるべし  
みちのくの海山哭くや雪の果  
わが息に応へて揺るや春の燭（計画停電）  
流されつ風とらへたり揚雲雀  
囀や双子のこ糸の見分かざる

○ 高橋和女

芽吹く樹のうす紅の夕べかな  
青き踏み老に折合ひつけて生く  
身のうちの地震ゆれ熄まず弥生尽  
余震なほ夜半のこぶしの花あかり  
見る人の心ごころの桜かな

○ 上野昌子

フロントガラスに猫の足跡四月馬鹿  
愈げものの洗車介助や花の雨  
巣組み鴉柿の小枝は盗むなよ  
リハビリの痛み再発寒き春  
春の夜や携帯メール初心者なり

○ 和田孝村

春満月地震禍あまねく抱擁す（悼二句）  
大地震に惑ふ此岸や鳥臺  
役辞して芽柳の風愛しめり  
鴨引くや塩田の町暮れなづむ  
性懲りもなく恋猫の闇へ出づ

○ 中村喜美子

地裂けて海猛れども花芽ぐむ  
黙す人還り来ぬ人待つ暮春  
生死の境越えて手かざす春焚火  
糸桜心の揺れと共に揺れ  
何も彼も夢であればと鳥雲に

○ 乗鞍三彦

弟のむかはり修す春の雪  
弟につづき友逝く春の雷  
畑打の夫婦休むに海を向き  
二級河川護岸工事や揚雲雀  
揚雲雀城の工事を見に上がる

○ 柴崎甲武信

見るべきは見つとや雛納めらる  
サヨナラと子らの人文字鳥雲に  
奥羽山脈右に左に鳥帰る  
天と地をまるごと映ししやぼん玉  
会者定離三月十日十一日

# 当月集

安立 公彦選



○ 矢口笑子

三月の寒さを言ひて別れけり  
とりあへず無事の報せや初燕  
屈託は風にあづけて青き踏む  
たんぼの無邪気な顔と出会ひけり  
節電に消ゆるネオンや春の月

○ 小山繁子

囀のあふれてをりし雑木山  
春の水鏡の音とあそびをり  
春寒や瓦礫の町を夕鴉  
春愁の頬をつつめる掌  
満天星の千の鈴振る光振る

○ 西岡啓子

春愁や空はいつもの色ひろげ(東日本大震災二句)  
白木蓮の鎮魂のごとひらき初む  
心療女医のながき睫毛や万愚節  
水音のそこかしこなり柳絮とぶ  
島恋うて走るやどかり忘れ潮

○ 後藤眞由美

浮雲の融けゆく空や花の山  
地震続く地や泰然とさくら咲く  
ふらこの鎖の奥の夕日かな  
涅槃西風あまたの御魂連れ行けり  
門口に銀目の猫や西行忌

○ 赤羽陽子

踏青や西へ傾くちぎれ雲  
梅散るや身に纏ひくる匂ひあり  
朱の鳥居抜けて不忍池や春  
バス停に子猫が二匹桜咲く  
酔の物は若布がよろし真砂女の忌

# 春燈の句

安立 公彦選

島を去る決意の集ふ卒業式

東京 川崎真樹子

万愚節涙欠伸のせいにして

春昼や耳搔さがす小抽出  
清明の水につけおく青菜かな

騙し絵に騙されてゐる三鬼の忌

凍解くる御滝の音ぞ貌よ鳥

地球包む一枚の空黄砂降る

後ろ手に影瘦せてをり麦を踏む

客足の途絶えし日々や地震の春

東京 坂本依誌子

人ごゑもあかりも消えしさくらかな

彼岸より十九夜念仏母のこゑ

あきなひのあかりともせずおほる月

啓蟄や落ちあふ場所は雷門

茶飯釜の茶とめし分かつ初桜

秘め事のありや薄氷音小さく

祈る手の苔のかたち鳥雲に

千葉 藤原 若菜

咲き満つる辛夷や募金に行く朝

鳥雲に小高き丘のプチカフェ

初蝶や北へと向かふ線路沿ひ

春の土しなやかに雀舞ひ降りぬ

疾く北へ桜前線急かさばや

細雨降る原爆ドーム柳の芽

ぶらんこの太陽けつて戻りけり

神奈川 浅木 ノエ

春愁のかほ映りゐるピアノかな

卒業写真リボンの母のセピア色  
込み上ぐる涙は尽きず三月尽（東日本大震災）



長野 木内 博一

千葉 金森 涼

神奈川 石田 康明

# 余言

安立公彦

例えば山間の小学校。転勤する先生を送るのに、子供たちは校庭に「サヨナラ」の人文字を描く。それを峠から見下ろす若い先生の姿。送る子供たちにも送られる先生にも、この山間の小学校での日々が鮮やかに去来する。  
親しい人、敬愛する人、そういう人との別れを通して、子供たちは成長してゆく。説得力のある、そして優しい思いの残る句だ。

亀鳴くに会はず仕舞の卒寿かな

片桐てい女

ひとり言のごとくに落つる椿かな

野崎 昭子

「亀鳴く」という季語は如何にも俳諧味に溢れる。へ亀鳴くや柱ランプの照返し 万太郎へ、亀鳴くや事と違ひし志敦へ、夜を着きしふるさとと亀鳴きにけり 櫻桃子。三師三様の思いも又この季語の情緒を良く表す。

作者の句、亀鳴くの表現を変化球で扱っている。それでは亀鳴くの直球とはどういう表現の句か、と煎じ詰めても結論は出ない。そこが如何にも俳諧的である。この句「会はず仕舞」というさし迫った言葉を用いながら、一読何とはなしの滑稽感を覚える。しかし再読すると、「卒寿」の語がその滑稽感を真情に変える。この季語の一方の旗手をなす句と言えよう。

サヨナラと子らの人文字鳥雲に

柴崎甲武信

「三・一一」この日から四十日経つ。死者一万四千余人、行方不明一万三千余人という数字に加え、原発事故の行く末は暗い。余震も続く。一方今朝の新聞には、被災地の一隅で竹の棒に吊した鯉幟を仰ぐ父子の写真が出ていた。マスメディアは挙つて、この重大な危機を前向きに対処しようとする姿勢

比喩の良く効いた句だ。比喩にはこの句のような直喩と、へ金剛の露ひとつぶや石の上 茅舎のような暗喩があることは衆知の通り。この落椿は花全体が落ちるのではなく一片ずつ散る椿だろう。  
この句、椿を良く観察して作っている。「ひとり言のごとくに」には、写生を越えた作者の思いも感じられる。

かの人もこの人も消ゆかげろふ立つ

諸岡 孝子

を出している。いいことだ。

作者は宮城県の北部気仙沼市に住む。三陸一帯の被災地の中でも、死者の数は、石巻、陸前高田、東松島、名取に次いで七六五名と甚大だ。「かの人もこの人も消ゆ」は直接被災した人でないと言えない言葉である。「かげろふ立つ」も作者の立場に身を置いて考えると、その震災の中にまさしく無常を見たという独語であろう。

宮城県から出句のあった五人の句を一句ずつ掲げる。

梅一輪背筋伸ばして生きよとや

齋藤 泰子

負けないで生き抜く心風光る

菅原 和子

茫然とただ茫然と街春泥

宮川 英子

一日は惚げごころや茎立す

熊谷 清子

津波退き遅日の海のあるばかり

西川 春子

三月の寒さを言ひて別れけり

矢口 笑子

情景としてはいろんな場面が考えられるが、作者はその場面を「別れけり」とだけ述べる。一句の内容は句を見る人それぞれに託されるのだ。

しかしこの句を注意して見ると、「寒さを言ひて」に作者の思いが良く出ている。それは同時発表の、「屈託は風にあづけて青き踏む」の中七と通うものがある。

春寒や瓦礫の町を夕鴉

小山 繁子

六月号の投句には東日本大震災の句が多かった。無理もないことだ。しかし俳句はレポートではない。震災の状況は新聞やテレビに委せ、俳句は作者のころを一句に詠うべきである。「風景のうしろに人生がなければつまらない 敦」の言葉を充分に咀嚼すべきだ。

この句、地震や津波などの言葉には一切触れず、「瓦礫の町」とどぶ「夕鴉」のみを句にしている。そこに敦の言う「風景のうしろ」の「人生」が浮かぶのである。

はや吾も最上級生よ桜咲く

藤原 典子

作者が「春燈」に入会したのは平成十七年十月号からと思う。当時小学校五年生だった作者も、今年の四月から高校三年生、「最上級生」となる。早いものだ、と振り返るのは年寄の言い草。作者の前には珠のような青春が開けているのだ。「最上級生よ桜咲く」に、確とした自覚と花咲く未来への若い息吹が潑刺と感じられる。

ゆでたまごつるりとむけてはるのかお 田中 晶帆

作者は小学二年生。昨年八月号からの投句。しかしこの句大人では思い浮かばない発想だ。「はるのかお」が茹で卵を手にした時の新鮮な思いにびつたりだ。これからも晶帆ちゃんの目に映る気持を句にして下さい。